
悪魔と契約しちゃいました

ガラクタ・エントツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と契約しちゃいました

【Nコード】

N5093Y

【作者名】

ガラクタ・エントツ

【あらすじ】

何の因果か、悪魔と契約してしまった主人公が、事件解決に仲間と共に奮闘すること。

第1章 「呪われた少女」 友人の頼みにより、なぜか学年一の美少女と付き合うことになった主人公。当然、そんな上手い話があるわけがなく・・・

第1話 悪魔と契約しちゃったかもしれない

「本当に、悪魔と契約してしまったかもしれない」

ここで言う悪魔とは別に、高利貸しでもなく、鬼嫁でもない。
文字通り本物の悪魔だ。

帰宅の途中、怪物に襲われて、悪魔に助けてもらったわけでもなく。

朝、目覚めたら、隣に可愛い小悪魔が裸で寝ていたわけでもなく、別に誰かを恨んでいたわけではなく。世界征服をしたく召喚したわけではなく。

ただ、単純に勢いで、近藤信也は悪魔と契約してしまった。

近藤信也は、自分の手の中にある 아이폰 を見て、そう思った。

美女。それは、遠くから見るもので、自分には縁がないもの。そう思っていた。

彼女。妄想の恋人ならいますが・・・現実にはいません。
恋。片思いならベテランです。

出会い。それは・・・突然にやってきた。

学年一の美少女、みなかみれいか水上麗華が、なぜか僕の目の前に居る。

少女は垂れ目で少々童顔、ストレートロングな髪で清楚なお譲様の雰囲気を漂わせていた。

その一方で、出るところは出ているグラマーな体形なので、男子の間での人気は断トツだ。

彼女と今まで一度も話したことがない。というよりも、半径5メートル内に近づいた記憶もない。

そんな彼女が、なぜか、同じ部活の星野守と久保恵に連れられ目の前に居る。

何でも、僕と彼氏彼女の関係になりたいらしい・・・建前上。

なんじゃそれ。

彼女には、変な噂がある。

彼女の彼氏になった男は死ぬ。という噂だ。

第2話 彼女

彼女に初めて彼氏が出来たのは、中2の夏。

同じクラスメイトだった。でも、最初の彼氏は、付き合い始めて3週間後、交通事故で死亡。

2年後、高校生1年生になった彼女は他の学校の3年生と付き合い始めた。

でも、その彼氏は、1週間後に行方不明になった。

以前にも家出をしたことがある彼の失踪は、家出ということでは、社会的には処理された。

この頃から変な噂が出始めた。

彼女の彼氏になった男は死ぬ。

彼女の美貌と人気に嫉妬した一部の女生徒や彼女に振られた男たちの悪口だった。

しかし、その噂は、悲しみに打ちひしがれた彼女をさらに追い詰めるものだった。

そんな彼女を励まし、救ったのが、昔ながらの幼馴染の少年だった。

半年後、彼女は幼馴染と晴れて恋中になった。しかし、その3番目の彼氏は、2週間後に自殺した。

これで確定的になった。彼女の彼氏になった男は死ぬ。

そんな噂が経っても、中には挑戦する猛者が居た。

4番目の彼氏は、2週間後に病気になった。

それ以降、多くの男たちに告白されていた彼女に対して、さすがに告白する男は居なくなつた。

以前は学年の中心的人物だった彼女は、「呪われた女」「不幸を撒く女」と悪口を言われ、女生徒にも避けられ始めていた。

「つまり、彼女の噂が事実でないことを証明するために、実験台になれと」

「そういうこと。確か、先週、オカルトネタは、ほとんどは偶然か勘違いか嘘って言ってたよな」

「確かにそうだけど．．．」

魔法や霊能力が起こす事件なんて存在しない。

推理小説好きの近藤としては、不思議なこと＝霊的な物という考えは受け入れられなかった。

万が一、幽霊が居たとしても、テレビやネットで騒がれるのは、99%紛い物。

それが、先週の近藤の主張だった。

もしか、先週の会話は今日の伏線だったのだろうか？

星野にはめられたようだ。

「なんで、自分なんだ。星野の方が良いじゃないか．．．水上さんだって、僕より星野の方が嬉しいだろ」

「．．．」

久保と水上がお互いの顔を見合つた。そして、水上が口を開いた。

「星野君は．．．駄目だよ」

「??？」

「星野君は、皆の王子様だから．．．」

星野王子様。それが女性との間での星野守の二つ名だ。
見た目も良く、運動もできて性格の明るい星野は、女生徒に人気
があり星野王子様と言われていた。

そして、王子様は誰のものでもない。皆のもの。だから、誰も手
を出してはならない。

これが、この学校の女子の間での不文律である。

ちなみに、女性との間での近藤の二つ名は金魚のフン。

星野に、いつも付いている邪魔なものと言っ意味らしい。

「こんなこと頼めるのは、お前しかいないだろ。それにこういうの
嫌いじゃないだろ」

正直言っ嫌いじゃない。

推理小説好きが高じて、名探偵にあこがれていた。
新聞を見て、推理するだけでは飽き足らず、高校生探偵と称して、
高校生相手に私立探偵の真似ごともしていた。

もっとも、漫画や小説のように活躍できるわけがなく、依頼の内
容の大半が浮気調査だったけど。

「お前、彼女ことが可哀想だとは思わないのか？」

「思っ」

「なんとかしてあげたい。力になりたいと思わないのか」

「思っ．．．」

何か星野に丸めこまれている気もするが．．．力になりたいと言
うのは嘘ではない。

機会がなかったから何もできなかったが、彼女が「呪われた女」

「不幸を撒く女」と悪口を言われているのを聞き、良い気持ちはい
ないなかった。

しかし、簡単にOKの返事は出来なかった。

自分が死ぬかも、と言うこと以前に...

「1つ問題があんですけど。その...僕には、好きな人がいるんですが...」

クラスメートの小野寺さん。

好きな人がいるのに、他の人と付き合うなんて浮気みたいではないだろうか。

それに、このことが原因で、小野寺さんに嫌われる、縁が切れるようなことはないだろうか？

「問題ないよ。今後、付き合う可能性はないわけだし」

「...」
さらっと、とんでもないこと言うな久保は。

久保は、小野寺さんと仲が良いので、真実味があるだけ心に刺さる。

「本当に彼女のことを好きになれって言うてるわけじゃないんだよ。

」と星野。

「建前上だよ。建前上。嘘でも、女性と付き合いえば、本命と付き合い際の練習になるだろ」

星野が近藤の側により耳元で女性陣に聞かれないように囁き始めた。

「それにな。女性って言うのは、フリーの男よりも、他人の男を欲しがるもんなんだよ。彼女と付き合いえば、小野寺さんの関心もお前に向かうこと間違いなしだ」

そういうものなのだろうか？

女心に疎い近藤には判らなかつた。

第3話 下校

その日の下校は、いきなり、彼女と一緒に下校することとなった。付き合っていることを皆に暗に教えるためだ。

近藤は自転車通学なのに、対して水上は電車通学なので、駅まで一緒に帰ることにしたのだが……話すことがない。

近藤は自転車を転がしながら、水上に付いて行くだけだった。気を利かせて、水上さんの方から話しかけてくれることを近藤は期待したのだが、水上も、何も話さずにただ黙々と歩くだけだった。

星野や久保が居た時は、平気で話せたのに、2人っ気になった瞬間、近藤は何も話せなくなった。

偽りの恋人なのに、緊張で話せなくなるとは、もし、本当の恋人だったらどうなっていたのだろうか。

星野が言っていた、本命と付き合う際の練習になるといっものは、もっともな指摘だった。

近藤は、自分はもう少しこういう状況になれておくべきだと思った。

気不味い、長い長い沈黙の後、どうにか駅に付いた。

「じゃあ、ここでさようなら。また明日、8時にね」と近藤は別れの言葉を告げた。

「恋人と別れるのに、それだけなの？」

「他に何か？」

「お別れのキスは？」

「……………」

おそらく、自分のことを試しているか、からかっているのだろうと近藤は思った。

「ここでキスをすれば、恋人らしく見えるでしょ。」

周囲を見渡すと、当然のことながら、同じ学校の生徒が何人も駅前に溜まり立ち話をしていた。

確かに水上さんの言うとおり、この場でキスをすれば周囲に恋人同士であることを印象付けられるだろう。

「演劇部なんだからできるでしょ。」

「照明と音響の係なんだけど……………」

「じゃあ、私の方からしたほうが良い？」

それは、さすがにまずいと近藤は思った。

「判った。右手を出して。」

「どう？」

近藤は彼女が刺し出した右手に軽く自分の右手を添えると、少し腰をかがめ、手の甲にキスをした。

「これが僕の限界です……………」

近藤が顔を上げ、水上さんの顔を見ると、驚いている様子も、怒っている様子はなく、むしろ少し喜んでいるようだった。

「今日のところは、これで許しあげるか。じゃあ、明日ね。バイバイ」

水上はそう言うと警戒に駅の階段を軽やかに駆け上がって行った。

「今日下校の時に、近藤とキスをしたんだ」

水上は、ベットに寝そべりながら、小学校からの親友である高井まどかに、今日の出来事を話していた。

「マジかよ。演技じゃなかったの。近藤と付き合うのは」

「演技だけど、どうせするんだったら、本当らしくした方が面白いでしょ。それにしたのは、唇じゃなくて、手の甲よ」

「手の甲？」

「そう。恋愛経験がない子って、面白いよね」

第4話 恋人

次の日は、朝から水上さんと一緒に登校した。付き合っていることを皆に暗に教えるためだ。

昨日の下校時よりも、皆が近藤を見ているような気がした。事実そうだろう。

そして、教室に入った瞬間、ざわつく教室と集まる視線に、近藤は自分がクラスの話題の中心、注目の的であることが良く判った。

そして、予想通りクラスメートの1人が、食いついて来た。しかし、予想外の人物だった。

近藤に最初に声をかけてきたのは、活発な雰囲気を感じさせるシヨートヘアの美少女。

僕の斜め前の座席に座る憧れの女性、小野寺さんが聞いてくるとは思わなかった。

「近藤君。水上と一緒に学校来たけど。もしかして付き合っているの?」

その質問に、クラスの注意が自分に集まっているのを感じた。

何とも言い辛い。

「その・・・付き合うことになりました」
背後から歓声上がる。

「いつから付き合っていたの」

「つい最近かな」

「どっちから告白したの」

これはさすがに自分とは死んでも言えない。

「なっ．．．何となく．．．あえて言うとな彼女かな」

「そうなんだ。星野君や恵ちゃんも知ってたの？」

側に居る星野と久保に話しかける。

「あたしも昨日知って驚いたよ」

久保は白々しく答えた。

「星野君は」

「僕はもう少し前から。近藤に相談されてね」

した覚えはないんですけど。

こんな感じで、他の女生徒も巻き込んで、会話は先生が来るまで終わらなかつた。

一方、水上麗華もクラスメートから質問を受けていた。

「ねえ、麗華。6組の近藤と付き合っているって．．．本当？」

最初に、声をかけてきたのは、麗華の小学校時代からの親友の高井まどかだ。

事前に、高井まどかには話しており、これは演技だった。

変なことを聞かれないように、事前に聞き役を高井まどかに頼んでおいたのだ。

もっとも、細かいやり取りは決めておらず、アドリブでやることになっていた。

「本当よ」

周辺からどよめきの声が上がった。

「3組のバスケット部の近藤君じゃなくて、本当に6組の近藤なの？」

「そうよ」

「あの地味で、金魚のフンって言われてるアイツだよ」

「そうだよ」

「えっ。なんで!!」と高井まどかは声を荒げた。

「麗華。親友でしょ。なんでそういう大事なこと、私に一言も相談してくれなかったの」

「ごめん。いろいろあって。それに、近藤君って．．．そんなに悪い人じゃないと思うけど．．．確か地味だし、普通の人だけど．．．」

「まあ、確かに．．．性格が悪いって聞かないし．．．後輩の面倒見も良いって聞くし．．．身長だって普通より高いし．．．見た目だって悪くないし．．．でも、どこが良いのよ」

それは聞かない約束でしょと水上は思った。

近藤のどこが良いのかなんて、水上には判らなかつた。

だから、それを聞かれないために、高井に頼んだに、高井自身完全に忘れてしまっているようだ。

「それは．．．私にも判らない」

「何よそれ。それは一時の気の迷いよ。いろいろあつたから」
周囲の女生徒もうなずく。

「今からでも、断りに行きなよ」

「それは駄目よ．．．だって、私から告白したんだもの」
予想外の展開に周辺の空気が凍った。

「麗華。どこが良いかも判らないのに、告白したの」
「しょうがないじゃない。だって、好きなんだから．．．」

2時間目の休み、男子学生がトイレに集まり雑談をしていた。

「なあ、知ってるか。近藤の話」

後から入ってきた鈴木は、高田に声をかけた。

「ああ」

「近藤の奴、羨ましいよな。あの水上麗華と付き合えるんだぜ」

「羨ましいか？ あの女と付き合おうと死ぬんだぜ」

「水上と付き合って、やれるなら、死んでも良いよ。近藤の奴、上手くやったよな」

「お前、前から麗華のこと好きだったからな」と手を洗っていた伊東が口をはさんだ。

「死んだら意味ないだろ」

高田は、水上を美人だと思うが、さすがに自分の命を犠牲にしてまで付き合いたいとは思わなかった。

「よっぽど、男に飢えていたんだな。近藤でもOKだったことは、俺でもOKだぜきつと」

伊東は肥満気味で容姿も悪く、女生徒の評判が良くないことを自分でも認識していた。

「なんでも、水上の方が告ったらしいよ」

「マジかよ。あいつのどが良いんだよ」

今まで水上麗華が付き合っていた男は、みんな格好良く、女性に人気がある男ばかりだった。

そのため、自分と同レベルか、それ以下だと思っていた近藤が、告白されたとの話を聞いて、鈴木は本当に悔しそだった。

「なあ、あいつが死ぬか。かけようぜ」と鈴木。

「いいな」と伊東。

「どうせなら、他の奴らも巻き込もうぜ」

こうして、学校全体で、近藤の生死をかけて、賭けが行われることになった。

第5話 昼休み

水上さんは1組で、近藤は6組とクラスは別々。

水上さんは茶道部で、近藤は演劇部と部活も別々なので、会うのは登校時と下校の時だけと近藤は思っていた。

「昼休み。ご迷惑じゃなければ、一緒に屋上でお弁当食べませんか」
そのため、3時間目の休み時間にメールが来た時は正直予想外だった。

「そのこうした方が、恋人らしいかなと思ひまして」
「確かに。周りにも何人かいますし・・・」

既に学校の屋上には、多くの人に来ていた。
それは、いつも、教室で食べていた近藤にとって未知の光景だった。

女性だけのグループや男女混合のグループ。
そして、一番多かったのが男女二人だけのグループだ。

良い場所は既に取られていて、直ぐに、良い場所は見つからなかった。
どうやら、皆、早めに来て場所取りをしているようだ。

開いている場所を見つけると、さっそく弁当を食べ始めた。

最初の数分は沈黙の時間が続いた。

姉や妹もいるし、女友達もいるし、部活では女性の方が多い。しかし、その会話は、兄妹の会話であり、友人としての会話だ。正直、恋人同士の会話なんて判らなかつた。

最初に口を開いたのは彼女だつた。

趣味の話から家族の話し。彼女は思ったよりも気さくな性格で、途中から思いのほか会話が進んだ。

「その．．．近藤さんのお弁当は誰が作っているんですか」

「自分で作ってます。両親が共働きで、海外出張も多くて。まあ、小6の妹以外は、みんな良い歳ですから」

「毎朝ですか？」

「毎朝。家族の分も作ってます」

「大変じゃないですか？」

「お金もらえるからね」

「そうですね」

なぜ、がっかりした様なリアクションをするのだろうか？
そして、何か非常に言い辛そうだ。

「その．．．少し作ってみたんですけど．．．食べていただけますか」

そう言うと彼女はカバンから小さな弁当箱を取り出した。
中には、綺麗にできた手作りの卵焼きなどが入っていた。

「いただきます」

食べてみると．．．美味しい。

うーん、本当にいろいろできる人だな。これで運動もできたら、完璧超人ではないだろうか。

それにしても、彼女がここまで恋人の振りをするとは意外だった。もっと片手間な物だと思っていたのだが・・・

それにしても、何なんだろう。この空気は。傍から見たら完全にラブラブのカップルではないだろうか。

「ごめんなさい。迷惑かけているでしょ。私、今のところ、これくらいしか近藤君に恩返しできなくて・・・でも、近藤さんが自分で作るんだったら必要ありませんね。私、どうしたらいいんでしょうか？」

どうやら、恋人の振りではなかったらしい。自意識過剰だな。

「気にしなくて良いですよ。僕も割と楽しんでますし」

「そうですか。お優しいんですね」

「いや・・・それ程でも・・・」

非常に照れくさい。

一方的に相手の好意に甘える関係というのは、意外と苦しい物だ。僕としては彼女との関係を円滑にしたいのだが・・・何か彼女にしてもらえないことはないだろうか。

「そうだな。終わったら・・・小野寺さんとの仲を取りもってよ」

「それで良いんですか？」

近藤は頷いた。

「判りました。頑張ります」

彼女は頑張ることを近藤にアピールするために可愛らしく小さくガッツポーズをした。

彼女の少し明るくなった態度を見て、何か少し関係が前に進んだ

ような感じがした。

「その・・・甘えついでに、もうひとつ、お願いして良いですか？」
「何ですか？」

「今週の土曜日、時間がありましたら・・・その・・・デートしませんか」

その言葉を聞いて、驚きのあまり、近藤は思わず、食べ物などを詰まらせてしまった。

第6話 脅迫

「土曜日にデート？ いつからそんな関係になったんだ」
星野が驚嘆の声をあげた。

場所は体育館の壇上の幕の裏。

部活の休憩時間を利用して、星野に現状報告することにした。

「今日の昼休み。彼女の方から」
近藤も得意げに報告する。

「ずいぶん楽しんでいるのね。こっちは心配で夜も眠れないのに・・・」と久保。

「冗談だろ」

「当然、嘘に決まっているでしょ」

「まあ、楽しむのは良いけど。あんまり浮かれるなよ。今、学校でお前の生死を賭けた賭けが流行っているんだから」

自分の命が賭けの対象か。

正直、気分が良い物でもないし、賭け自身法律違反だが・・・ここでそれを言っただ怒るのは野暮だろう。

「比率は？」

「2対3かな」

「どっちが3なんだよ」

「お前が死ぬ方だ」

「みんな酷いな」とは言ったものの過去3人は漏れなく死んでいるわけ・・・

みんなが死ぬ方に賭けなくなる気持ちも判らなくもない。

「だったら、生きる方に1万円賭けておいて。生きる励みになるから」

「じゃあ、俺は．．．お前が死ぬ方に1万円な」

「じゃあ、私は5千円かな」

「何だよ。それ」

「お前が死んだとき、悲しみが癒えるだろ」

「．．．．．」

「冗談だよ。俺は、お前が生きる方に1万円賭けているんだから頑張ってくれよ」

現在の時間は夕方の6時31分。1分遅刻だ。

一緒に下校するため、6時30分と待ち合わせしていたのに遅れてしまった。

水上さんが校門のところで僕を待っているが、ロビーからも見える。

その姿が妙に愛らしい。

偽りの恋人同士のはずだったのに。

登校と下校の時だけの付き合いのはずだったのに。

日曜日、デートですか．．．

何と言つか、どんどん展開がエスカレーションしている。

ひよっとしたら、水上さんとあんなことやこんなことをする関係にまで発展するかも。

そんなことを妄想しながら、僕は下駄箱を開けた。

隙間から入れたのだろうか。

中には、一枚の手紙が入っていた。
まさか、ラブレターか。
まさかのモテキ到来か。

手紙には、宛名も差出人の名前も書いていない。
急いで手紙を開けると一枚の紙が入っていて、その紙には2行の
短い判り易いメッセージが書いてあった。

「水上麗華と直ぐに別れる。

さもなければ死ぬことになるぞ」

さっきまで浮かれていた自分がバカみたいだ。

でも、この手紙でいくつかのことがハッキリした。

悪霊が手紙を出すはずがないので、彼女は人間に恨まれている。
しかも、直ぐに手紙が来たことから、たぶん、この学校の人間に
だ。

過去にも、彼女の彼氏たちは、このような手紙をもらっていたの
だろうか？

彼女に聞く必要がある。

でも、今日の下校時は止めて明日にしよう。

せめて、今日くらいは、楽しく終わりたいから。

昼休みに打ち解けたせい、昨日と打って変わって、いろいろと
話すことが出来た。

昨日は、長く感じられた時間も、なんだかあっという間に過ぎて

駅に着いた。

「じゃあ、また明日」と自転車に跨る近藤。

「近藤君。」

水上が呼び止めた。

「何？」

「頭にゴミ付いているよ」

水上は、自分の側頭部を指さす。

「そう？」

近藤は頭を払った。

「取れた？」

「取れてないよ。しょうがないな。こっち向いて。取ってあげるから」

近藤は水上に言われるがまま、何も考えず、水上の方を向いた。

その瞬間、水上は、近藤の首に手を回すと、近藤にキスをした。

とっさのことに、呆然とする近藤。

そして、我に帰ると、徐々に近藤の顔は赤くなっていった。

「男の方が、顔赤くして、どうするのよ。じゃあ、明日ね。バイバイ」

水上はそう言うと警戒に駅の階段を軽やかに駆け上がって行った。

近藤はベットの途中で、唇に触れ、水上さんとのキスの感触を思い出した。

ふと、近藤は自分の唇に触れた。そして、彼女の唇の甘い感触を思い出した。

デートの話といい、今回のキスといい、彼女は予想以上に積極的だった。

単純に近藤をからかっているのだろうか。

それとも、もしかしたら、本気なのだろうか？

近藤は、そんなことを考えながら、いつの間にか寝てしまった。

第7話 暗い影

登校後、下駄箱を開けると、また手紙が入っていた。

封筒は昨日と同じものだ。

昨日と同じ脅迫状だろう。

手紙を開けると、昨日と同じように、短いメッセージが書いてあった。

「お前は死ぬ。残りの人生をせいぜい後悔して生きるが良い」

昨日は脅迫状だったのに、たった一晩で、死亡宣告になっている。

しかも、殺すではなく、死ぬになっているところが、何とも微妙な表現だ。

昼休み。

前日の失敗を糧に、場所取りのために、授業が終わると直ぐに屋上に向かった。

意外なことに、まだ、誰も来ておらず、1番だったようだ。

うちの学校の良いところは、屋上にベンチがある点だ。

そして、座るんだったら、南向きで温かく見晴らしが良いところが良かった。

近藤は場所取りをすると、水上さんを待った。

「近藤君」

背後からの呼び掛けに、振り返るとそこには、水上さんではなく、憧れの小野寺さんが居た。

なぜ、小野寺さんがこの場に居るのだろうか？
いつもは教室で食べているのに。

「近藤君。水上さんと一緒にランチを食べているの？」
「そうです」

「水上さん。近藤君のためにお弁当作ってるんだってね。美味しい？」

「なかなか、美味しい・・・です」
「ふう〜ん」

そう言つと小野寺さんは、フェンスに近づいた。

そして、振り向くと近藤に対して突然予想外の質問をした。

「ねあ、近藤君。私と水上さん、どっちの方が好きなの？」

近藤としては、当然、小野寺さんだ。

だが、現状の建前上、小野寺さんとは言い辛い。

「今、言わないと駄目ですか」
「ハッキリしないわね」

そして、何を思ったのか、突然、軽々とフェンスを超え、屋上の淵に立った。

「日射しと風が気持ち良いわよ。」

「あぶないよ。小野寺さん」

「スリルがあつて楽しいんじゃない。近藤君も来なよ。それとも来る勇氣ない」

弱虫に思われたくない近藤は、慎重にフェンスを越えた。

校舎は4階建てなので、地上まで十五メートル近くあるだろうか。正直、近藤はかなり怖かった。

一方、小野寺さんは、そんな場所なのに顔色一つ変えないで笑顔で立っていた。

「もう一度聞くね。近藤君。私と水上さん、どっちの方が好きなの？」

「本当に、今、この状況で言わないと駄目ですか」

近藤としては、当然、小野寺さんなのだが、近藤としては、もっとロマンチックな状況で言いたかった。

「駄目。今すぐ言って……直ぐに行ってくれないと、飛び降りるわよ」

「そりゃ……当然……」

「近藤君。何やっているの？」と激しい口調の声が聞こえた。

声の方向に振り向くと、心痛な表情をした水上さんが居た。

「その……いろいろありまして。ねえ、小野寺さん」

振り返ると、そこには誰も居なかった。

さっきまで間違いなく、そこに居たはずなのに。

それに、周囲には誰も居なかったはずなのに、何人もの生徒が、既に屋上には居た。

幻覚なのだろうか？

「……ちょっと、ペンを落としまして。大丈夫です。もう

拾いましたから」

近藤は自分でも下手な嘘だと思った。

近藤は、誤魔化しの笑顔浮かべながら、再び慎重にフェンスを越えた。

「．．．私．．．私．．．」

水上は、それ以上言葉を続けなかった。

そして、薄らと涙目になり始めた。

近藤には、その先の言葉が想像できた。恐らく、近藤が自殺すると思ったのだろう。

女性に泣かされることはあっても、泣かすことはないと思っていた近藤には、彼女を落ち着かせる気の効いた言葉が思いつはずもなかった。

「．．．．．」

側に寄ることもできず、ただ彼女を見るだけ。

気不味い沈黙を破ったのは水上だった。

「近藤君。早く。こっちに来て、ご飯食べよう」

水上は、明るい声で近藤に呼びかけた。

「そうですね」

近藤も、無理をして明るい返事をした。

近藤と水上は、ベンチに座り昨日と同じようにお弁当を食べ始めた。

そして、「明日、デートでどこに行くのか」「映画は何を見るか」「何を食べるか」などを簡単に話し合った。

彼女との会話は、表向き、昨日以上に楽しく進んだ。

だが、近藤の頭は常に別のことを考えていた。

なぜ、あんな幻覚を見たのだろうか？

もしかしたら、水上さんの彼氏たちが死んだのは、あのような幻覚を見せられたのが原因ではないだろうか？

そして、このことは、死の手が迫って来ていることを意味するのだろうか。

そして、どうすれば、死の手から逃れられるのだろうか。

近藤は、昼休み以降、一日考え続けたが、結局答えは何も出なかった。

第8話 呼び出し

お風呂から上がった後、近藤は寝る前にメールを確認した。
一通、差出人不明の気になる表題のメールが入っていた。

「水上麗華の彼氏へ」

急いで本分を読む。

「不幸を避けたければ、今夜十一時に、一人で ×公園に来い。ブランコのところで待っている」

いきなりの呼び出しだ。

もしかしたら、今日、脅迫状を出した人物かもしれない。
行くべきか。

行ったら襲われるかもしれない。

しかし・・・うまく行けば相手の正体を掴むチャンスだ。

近藤は大急ぎで、パジャマから外出着に着替えると、自転車で

×公園へと向かった。

×公園は、近藤の家から五分程離れ、団地の側にある小さな公園だ。

日中は幼稚園生や小学校低学年生が良く遊んでいる公園だが、夜の十一時にもなると、通常はさすがに誰も居ない。

しかし、今夜は、公園の外灯がブランコに座る長髪の女性を浮かび上がらせていた。

近藤はメールの内容を信じては居なかった。

近藤が公園に近づいたところを、背後から襲う気なのではと考えていた。

そのため、相手の裏をかき、距離を置いて公園の周りを探索して、メールの差出人の正体を探ろうと考えていたのだ。

どうどうと空いたが姿を現すのは、近藤にとって予想外だった。

もっとも、仲間が居て、一人じゃない可能性もある。

近藤は警戒して周囲を調べるが、彼女の仲間らしき人物はいなかった。

時計を見ると十一時十分になっていた。

どうやら相手は本当に近藤と会いたいらしい。

近藤は意を決して、相手の側に行くことにした。

少し近くになると顔を見ることが出来た。

凜とした顔つきの女子高生らしき女性だ。落ち着いた大人びた感じで女子大生かもしれない。

ベージュのブレザーにジーンズと落ち着いた服装が長身でスリムなスタイルに良く似合っていた。

「あなたが近藤信也君？」

近藤に気がついた彼女はブランコに座りながら僕に声をかけてきた。

「そうです。」

「最初から女性を待たせるなんて、ずいぶん大胆ね」

「そこは相手次第ですよ。それで話って何ですか」

「そう焦らないの。そんな緊張して立っていないで、横に座って頂戴。話辛いでしょ」

彼女は明るい声で僕を隣のブランコへ誘う。

近藤は背後に気をつけながら、彼女に横に座った。

「あなた、彼女の噂知っているでしょ。なんで彼女と付き合い合おうと思ったの？ 美人だから。それとも、好奇心。それとも、一目惚れ？」

彼女は茶化すような口調で質問を始めた。

「そんなのあなたには関係ないでしょ」

「大いに関係あるわよ。特に私のモチベーションにね」

「モチベーション？」

変な理由を言う人だなと近藤は思った。

「そうよ。あなたが心の底から彼女を愛しているなら手伝う気になるし。好奇心なら．．．死んでも自業自得かな」

「あなたは、彼女の何を知っているんですか？」

「あなた彼女が本当に呪われていると思う？」

「彼女は、呪われていません」

「そうよね。そうじゃないと付き合い合おうなんて考えないわよね。彼女は呪われていない。それは正しいわ。でもね。彼氏が間違いないく死ぬって点も間違っていないのよ」

そう言つと彼女の顔は突然真剣なものになり、近藤の目を見て話し始めた。

「今のままでは、あなたは殺される。間違いなくね」

殺される？

「どうやら、彼女は事故死や自殺ではなく、他殺だと考えているよ
うだ。」

彼女は警察以上の何かを知っているのだろうか？

「あなたは、彼氏が死んだのは事故ではなく、他殺だって言うんですか」

「間違いなくね。彼女の側に、彼女の彼氏を呪う殺す人間がいるの」「警察の結果では事故や自殺ですよ。それも呪の結果ですか？ 呪の結果、都合良く事故に合い、自殺すると」

「そうね。結果的に、この世界ではね。でも、別の世界では違うわ。彼らは悪魔に魔力で殺されたのよ」

何か話が急におかしい方向に行き始めたぞ。

「なんで、そんなことが言えるんですか？」

「それは簡単よ。私が『茨の魔女』だから。私が悪魔と契約した人間だからよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5093y/>

悪魔と契約しちゃいました

2011年12月17日05時54分発行